



Title	総合農学について
Author(s)	工藤, 元
Citation	季刊農業経営研究, 3, 10-10
Issue Date	1958-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36261
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_10.pdf



総合農學について

工 藤 元

終戦後わが国の教育制度は大きく変つたが、農業教育では総合農學の導入が最も大きな変化であつたと思う。これは、簡単に言えば、アメリカの高校における農業教育のやり方を輸入したものである。従来、日本の農学校の教育では、多くの科目を別々な教師が担当して居り、全体としての総合性に欠け、実際の役に立たない感がないでもなかつた。アメリカでは、高校の農業課程 (Vocational agriculture) を担当する教員は僅かに1~2名であり、それで農業の授業を一切引受けている。作物・土壤・気象・経営等々と科目を分けて教えるのではなく、農業という科目一本で、実際の農業から離れず、Learning by Doing の精神で、生徒自身の自発的研究を基礎として教育を行う。これは非常に大きな効果をあげ、アメリカ農業の発展に寄与している。

ところが、アメリカ式の農業教育を日本の高校に取入れ、これを実施して行くに従つて、色々な困難が生じて来た。例えば作物・畜産・土壤・病虫害・経営等を一本にまとめ、総合的かつ实际的に農業を教え得る教師が非常に少い。そこで全国12大学に総合農學科を設け、ここで農業教員の養成を行うことになつた。しかし僅か4年の課程で、

農業全般に通ずる有能な教師を養成することは、現在の大学制度下では、かなり困難である。

農学校側としても、広く浅い能力を有する教師よりは、専門別に、高度の能力を有する教師を揃えたいという気持ちを容易に捨て切れない。

私の見る所では、アメリカの農業は単角的であるから、例えば小麦地帯の学校では、小麦を中心に土壌・肥料・作物・経営等を総合的に教えるのが容易である。日本の農業は多角的なので、アメリカ式に Project を中心に教育を進める方法は必ずしも、能率的ではない。総合とは言つても、経営全体の立場から見ての総合という点では、従来の方法よりはるかに優るとは言い難い。従来のやり方でも、各科目を担当する教師が相互の連絡を密にし、経営との結び付きに注意し、しかも実際に役立つような教育をするように努力するならば、精神を忘れて形だけを真似た総合農學よりも良いものになり得ると思う。

農業教員を養成する大学には総合農學講座が設けられたが、これはある意味では従来の農業経営學に対する不信の表明である。農業経営學者に農業経営をやらせたらうまく行くとはいへず、経済學者に金もうけを期待するのは無理である。しかし農學の中でも最も農學的でありたい農業経営學が経済學の出店となつたり、土から離れた机上の學問となつてしまうことについては、やはり反省を要するものと思われるのである。

(帯広畜産大学教授)

1957年刊行された主な農業経済學書

農學成立史の研究

飯沼 二郎著
御茶の水書房 400円

日本農業史

古島 敏雄著
岩波書店 320円

農業理論研究入門

近藤 康男編
東大出版会 300円

農業理論の現状と展望

綿谷 昶夫編
西村 甲一編
東洋経済新報社 480円

チャヤーノフ原著 小農經濟の原理

磯部 秀俊訳
大明堂 480円

チャヤーノフ 農業經營適正規模論

阪本平一郎訳
林 秀男
地球出版社 250円

農村社会の潮流

福武 直著
時潮社 250円

日本の經濟と農業 (上・下)

東畑 精一編
大川 一司編
岩波書店 500円

農業生産の展開構造

東畑 精一編
磯部 秀俊
岩波書店 500円

農家經濟

大内兵衛外編
中央経済社 450円

農業生産力構造論

崎浦 誠治著
養賢堂 450円